

「チェンバロの日！2019」開催

～ いろいろな調律 ～

日程： 2019年5月11日(土) 12日(日)

会場： 松本記念音楽迎賓館 (東京・世田谷)

2日間にわたって開催する、当協会恒例の主催事業「チェンバロの日！2019」の詳細がほぼ決定いたしましたのでお知らせいたします。会場は今年も世田谷の静かな住宅地にある素晴らしい洋館「松本記念音楽迎賓館」。テーマは「いろいろな調律」です。館内部の様々な場所で催し物を計画しています。それでは、ご紹介いたしましょう。



◎ 1階

<玄関 / 受付>

参加される方の受付になります。こちらでチケットを受け取り、ご入館ください。催し物一覧が載っているプログラムをお渡しいたしますので、参加される催しの確認などもできます。協会受付が隣にあり、会員・サポーターの方々には次年度会員更新手続きも受け付けております。新しい会員証と年報のご用意もあります。会員更新の方々にはもちろん年報をお渡しする予定です。

<レセプション・ルーム / 物販、懇親会 11日 17:30～>

受付の向かい側にあるお部屋で、協会関係の物販コーナーと、アカデミア、ユニヴァーサルの出店による楽譜・CDなどが割引価格でお求めいただけるブースがあります。今年のテーマに沿ったものも、そこで探してみてくださいね。また広間にはゆっくりとお話出来る椅子もあり、例年好評のチェンバロ・カフェが今年も開かれる予定です。そのまま素敵なお庭探索に出かけられるテラスもありますので、この部屋でゆったりしながら、1日の計画を立てるのもいいですね。

初日の夕方からこちらで懇親会も開催されます。入館チケットをお持ちの方はどなたでも無料で参加可能です。チェンバロ奏者も愛好家も、この日は一緒におしゃべりに花を咲かせましょう。

<サロン>

今年は休憩スペースとして開放予定です。この迎賓館の珍しい蓄音機や、風間千寿子氏から預かっている貴重なプレイエル社製ランドフスカモデルのチェンバロも置いてあるというあっと驚くお部屋。今年はこのチェンバロでの演奏は予定されていませんが、見るだけでも貴重な体験となるでしょう。

<Cホール / ペーパークラフト 12日 14:00～>

2日目にはこちらでミニチュアチェンバロを作るペーパークラフト教室が開催されます。毎年自分好みに出来上がる作品に歓声が上がります。お子様から大人まで楽しめるユニークな時間。予定にどうぞ組み込んでご参加ください。その他、空き時間に皆様に楽しんでいただける企画を計画中です。

◎ 2階

<Aホール / 演奏会 11日 14:30～、12日 15:00～・フリーコンサート 12日 10:00～>

木目の美しいこのAホールでは今年もチェンバロ奏者による演奏会が両日とも、また2日目には公募した方々によるフリーコンサートが行われます。演奏会では、今年のテーマと関連する内容を盛り込んだ興味深

いプログラムが演奏されます。ご期待ください。来場者試奏タイムもありますので、フレンチ・チェンバロを間近でご覧いただき、実際に演奏していただくこともできます。

<Bホール / 演奏会 11日 13:00~・講演 11日 16:00~ 12日 16:15~・座談会 12日 13:00~>

庭の眺めの良いこのBホールでは、分割鍵盤を持ったイタリアン・チェンバロが用意されます。この楽器を用いての演奏会、試奏、そして、製作家による調律に関する講演が、また調律に的を絞った座談会が行われます。そして、当会の会長による興味を引く題目「聴衆を音楽の世界に導くにはどうすべきか」の講演も開かれます。このように熱いやり取りが行われる部屋となっています。

<和室>

畳敷きのゆったりとしたお部屋は、持参したお弁当などを広げるのにぴったりです。終日開放します。たまには靴を脱いでリラックスして・・・なかなか良いですよ。

♪ 催し物出演者・講師

演奏会	:	中川岳 (11日)、辰巳美納子 (11日)、冢喜美子 (12日)
講演	:	久保田慶一 (11日)、加屋野木山 (12日)
座談会	:	栗形亜樹子・藤原一弘・横田誠三、[司会] 大塚直哉
ペーパークラフト	:	久保田みずき

調律・音律はチェンバロ奏者にとっては大切な事項でもあります。今回のテーマで再確認、再認識、興味を深めるなど会員のみなさまにとって有意義な時間となりますよう、チェンバロの日チーム一丸となって準備を進めております。是非ともこの2日間、今から予定をチェックの上、お申し込みいただきますようお願いいたします。詳しい情報はホームページ上で順次お知らせを進めますので、そちらのチェックもよろしくお願いいたします。
(チェンバロの日！チーム)

🍷 例会報告 🍷

🍷 例会についてお知らせ

日本チェンバロ協会会員・サポーターの皆様へ

平素、日本チェンバロ協会の活動にご支援・ご協力をいただき、感謝申し上げます。

さて、平成30年度より当分の期間、当協会が開催いたします例会の参加費につきましては、会員は「無料」、サポーターの方は「割引料金」とさせていただきます。奮ってご参加ください。

なお、例会以外のイベントやレッスンを含む例会等につきましては、従来通り、会員ならびにサポーターの方には、「割引料金」を適用させていただきます。

また例会は年度ごとに5回を「定例会」とし、そのうち、少なくとも1回は東京以外の場所で開催させていただきます。随時、開催いたします例会は「臨時例会」とさせていただきます。

会長 久保田慶一

第34回例会 (2018年度第2回定例会)

【通奏低音講座 (初級実践編) ~ コレツリの通奏低音を弾いてみよう ~】

2018. 10. 28. スタジオピオティータ (東京都杉並区)

講師：野澤知子 演奏：高橋奈緒 (ヴァイオリン)

今回は初級実践編と題し、アルカンジェロ・コレツリ (1653-1713) のヴァイオリン・ソナタ op. 5-1 (1700) を、同時代のアントニオ・トネリ (1686-1765) によるリアライゼーションを用い、

ヴァイオリンと一緒に演奏してみようという初級者のための講座です。

私は半年ほど前に通奏低音の入門講座を受講して、基本的な数字の読み方や規則を学んだばかりの

トラヴェルソ愛好家です。通奏低音の知識はチェンバロ奏者だけでなく、旋律楽器の人にも不可欠で、今回の講座にもチェンバロを弾く方以外に、ヴァイオリンなどの旋律楽器の参加者もいらっしゃいました。

申込者には事前に初版譜とトネリ編の楽譜を提供されていたので、自分なりに和音を入れて準備していきました。

当日、さらに同曲の別の楽譜を渡されました。ロジャー版（1723）というヴァイオリンの装飾譜入り三段譜です。

野澤先生のお話は終始理解しやすい言葉で専門用語も全員が理解できているか確認しながらの懇切丁寧なものでしたので、私のような初心者も無事ついていけたと思います。

はじめに作曲家コレッリの紹介と、op. 1 から op. 6 までの構成、op. 5 の 12 曲のヴァイオリン・ソナタ集は重音が出てくることでも画期的であるなどのお話がありました。

次に、これを課題に選んだ理由です。聴講者の多数にとって、コレッリは有名でも演奏経験で言えば実は馴染みのない作曲家でした。ですが、初期バロックより少し後、バッハの少し前の中期バロックに位置するコレッリは、自国のみならずフランスやドイツなどの作曲家に多大な影響を与えたことでしょう。例えば、私はフランスの作曲家ブラヴェのフルート曲のレッスンで「ここはコレッリ風にね」と言われたことがあります。この作曲家は金銭的に恵まれていたのか楽譜を急いで出版する必要がなかったようで、推敲を重ねた末に出版されたため内容がすばらしく、数字の勉強をするには最適な教材である、とのことでした。

また、ロジャー版の装飾譜について説明がありました。ルネサンスから初期バロック音楽における装飾は、一つの音価を二～八分割するディミニューションでしたが、コレッリの時代になるとオーナメンテーション（コロラトゥーラ）に発展し、音価に対して字余りになるほど装飾の音が多くなります。1 拍のなかに 12 個から 24 個もの装飾音符がぎっしり詰まっています。私も以前、ルネサンス曲のディミニューションに挑戦したことがあり、つい最近ではボワモルティエのフルート・ソナタでこのロジャー版とそっくりの装飾に取り組んだばかりだったので、非常に親近感を持てる話でした。これを通奏低音と合わせるのにはコツがいます。緩徐楽章で旋律奏者がテンポ・ルバート（原意は「時を盗む」）でディミニューションをたくさん入れているとき、通奏低音奏者は拍をきちんと刻んであげることです。ここで野澤先生は演歌歌手の歌い方を例

に挙げられましたので、一同笑いつつも非常に納得できました。

レクチャー後半は4名の受講者が1楽章ずつ受け持ち、ヴァイオリンと合わせる実践練習でした。トネリの譜を用いても、自分で考えたものでもかまいません。渡されたばかりのロジャー版装飾をヴァイオリンの高橋さんに演奏していただき、皆さんぶっつけ本番でした。演奏のあと、具体的にトネリ譜の特徴的部分や伴奏の技術について解説していただきました。

- ・低音が数小節に渡ってタイで結ばれ、コレッリが Tasto solo（右手を弾かない）と指示しているところに、トネリは右手の和音を書いている。このようにオルガンを想定したと思われる部分は、チェンバロでは音が減衰するので小節ごとに弾き直すとのよい。

- ・曲の冒頭は、旋律奏者のメッサ・ディ・ヴォーチェによって、通奏低音奏者は曲のテンポを得る。音の膨らみに合わせてアルペジオを効果的に入れるとよい。

- ・トネリ譜は右手が旋律とほぼ同じ高さ、ときにはもっと高い箇所があるが、ロジャー版によるとヴァイオリンが装飾で華麗に高音まで鳴らしているのでちょうど良い。通奏低音奏者は、旋律奏者がどのように装飾を入れるか気を配らなくてはならない。
- ・バスが書かれていないところに、トネリはヴァイオリンと同じ旋律を入れている（バス・セグエンテ）。

- ・スティレ・ピアノ（音が満ち満ちている）の特徴を持つトネリ譜は、声部が美しく横に流れ、シンプルなハーモニーが途切れることがない。

- ・フーガの入りはバスもかけ合うと良い。
- ・和音はアルペジオで弾くのが基本。和音の性格を引き出すときにはアルペジオの弾き方を工夫する。「不協和音はテンションがかかり、その後に緩む」に気をつけるが、チェンバロは強い音が出ないので、やはりアルペジオを工夫する。どこでテンションをかけるか数字を良く見るようにする。

- ・定形カデンツのところでは枠（いったん終止）を作ってあげることがポイント。

- ・数字が書かれていないときは、5あるいは6を試してみる。曲によって数字の付け方はケースバイケース。

- ・トネリは規則にとらわれず大胆にリアライゼーションしているところもあるが、学習者はあくまで四声体で、規則に従うよう努力すべき。

- ・op. 5 は装飾譜のバリエーションが豊富にあり、ジェミニアーニ、タルティーニ、ヴェラチーニなど

いろいろと比較しながら興味深く勉強ができる。通奏低音奏者は上声部を知っている必要があり、歌って練習することが望ましい。

最後に私からイタリアンスタイルの特徴について質問をしたところ、野澤先生はいちばんの特徴として先の「ステレ・ピエノ」を挙げられました。またイタリアンスタイルを学ぶのに適した曲として、アルビノーニ（バッハの弟子 H.N.Gerber の伴奏譜がベーレンライターから出版されている）、それからバッハのイタリア協奏曲第二楽章を挙げられました。

今後のアドバイスとして、大事なものは一次資料（その時代に作曲家が書いた楽譜）に触れること、ソロ・レッスンと通奏低音レッスンを交互にするのが理想であること、リアライゼーションを先生に見せて添削してもらうこと。「努力なくして上達はありませぬ。先生に横について見てもらってください」との助言をいただきました。

講義の後、受講者に感想をうかがいました。

・野澤先生がとてつよい雰囲気をつくってくださり、よく導いてくださったので良かったです。（I さん）
・トネリのリアライゼーションを初めて弾かせて頂きました。本来であれば通奏低音で禁止とされる導音の重複があったり、ヴァイオリンのパートと重なる音域に右手が書かれていたりするのが興味深かったです。（下川れいこさん）

・通奏低音初心者なので合わせて弾くことで精一杯でしたが、今後通奏低音のルールを学ぼうという新たなきっかけになりました。理論とのバランスをとりながら技術を身につけていきたいです。とても楽しかったです。（古家岳さん）

・アンサンブルの経験があまりなく、今までコレツリと向き合ったことがなかったので、このような機会を頂けて良かったです。（山本明日美さん）

聴講者からは、「今まで数字だけで勉強していたので、ヴァイオリンと一緒に聴けたことが有意義だった」「まだ数字の付け方を習い始めたばかりですが勉強になりました」などの感想がありました。

私自身、和音を楽譜に起こしてから演奏するのが精一杯ですが、別のジャンルの楽器の人同士が交流でき、世界が広がるのが楽しみです。引き続き勉強していきたいと思ひます。このような勉強の機会をまた作っていただきたいです。

（レポート執筆：野口 薫）



第 35 回例会（2018 年度第 3 回定例会）

【日本のチェンバロの歴史は関西から始まった！ ～ 昭和初期我国でのチェンバロブームを検証する ～】

2018. 10. 6. テアトルラモー（神戸）

講師：梅岡俊彦

時代は明治 22 年（1889）まで遡り、1930 年頃の蓄音機で当時の演奏を聴きながら、昭和 43 年（1967）までのチェンバロ復興の歴史を辿りました。

講演の最初に蓄音機で聴いた、楽器製作家 A. ドルメッチのクラヴィコードでの J.S. バッハの平均律の演奏はとても興味深く、当時の録音事情が録音の際のテンポ設定にも大きな影響を与えることがわかりました。録音事情を知っているか知らないかで、きっと彼の演奏に対する感想も変わるのでしょう。

ランドフスカがヒストリカル・チェンバロを持っているにも関わらずモダン・チェンバロを演奏会や

録音で弾いていた理由や、彼女のイメージ戦略（かもしれない）を垣間見ることでもできました。

偶然にもインターネットで発見されたというチェンバロを演奏されている日本人演奏家のお写真から、これまで調査される中で見つけれられたピースのようなモノがパズルのように繋がり、どの会社の楽器で、どなたなのか、というところまで調査されていっしやいました。

これからも調査が進められる中で、昭和初期のチェンバロブームの中で演奏された楽器や、演奏家の方の発見などがまだまだあるのだらうと思ひます。

終始とても楽しく、蓄音機での録音再生や資料のお写真とともに解説くださり、こんなにも昭和初期にチェンバロブームが日本で起こっていたことに、本当に凄く驚きました。

このチェンバロブームの流れが、大先輩に当たる師匠方に繋がっていくもの、そしてさらには、私達の世代にまで流れている事を強く実感することができました。

私の中で、今までぽっかりと空白になっていた部分が、鮮やかに色付けされていくようで、とても興味深く楽しい時間でした。

様々な曲を聴いて、この蓄音機のラッパの向こうに演奏者がいるのかと思うくらい生き活きと、時に

は生々しく聴くことができる貴重な機会でした。そして何よりも、梅岡さんの探究心と熱意に、深く感銘を受けました。

できるものなら、チェンバロブームに湧く昭和初期の日本の関西にタイムトラベルしてみたいです。

(レポート執筆：染田真実子)



第 36 回例会 (2018 年度第 4 回定例会)

【ガイド・ダレッツォ『ミクロログス』を読み解く ～ 音の読み方、楽譜の書き方…中世の“楽典”はどう教えられていたのか? ～】

2018. 11. 18. 国立オリンピック記念青少年総合センター (東京)

講師：宮崎 晴代

「ドレミの創始者」として知られるガイド・ダレッツォ。譜線楽譜もなく、教会旋法の理論も固まっておらず、音の読み方も定かでないあの時代に、ガイドは少年たちにどうやって楽譜を読んだり書いたりさせたのか?」チラシの一文に引かれて、街路の銀杏が色づく 11 月 18 日 (日) に国立オリンピック記念青少年総合センター内で行われた、チェンバロ協会の例会に初参加させて頂きました。

講師の宮崎晴代先生は、6 月に出版された「ミクロログス (音楽小論) 【全訳と解説】 / ガイド・ダレッツォ (著) 中世ルネサンス音楽史研究会 (訳) / 春秋社」の訳者のお一人として、解説論文「教育者ガイド—ソルミゼーション教育とその伝承」の執筆者として、本書の出版に 17 年間も関わって来られたとのこと。翻訳秘話も交えながらの臨場感あふれる先生の講義は、終始楽しく分かりやすく、時代背景からガイドの重要な理論一つ一つの解説におよび、まさに「ミクロログスを読み解く」ために必要なガイドを惜しみなく頂いた 3 時間半でした。

参加者は事前に入手、または会場で購入した本書を手手に、準備されたパワーポイントや配布資料を参照しつつ、下記のトピックに沿って受講しました。

1. ガイドの時代のヨーロッパの概観 (西洋キリス

ト教音楽の始まり、ガイド以前の理論家たち、ガイドの生涯、実践的な音楽理論書「ミクロログス」が書かれた背景について)

2. ガイドの 4 つの著作 (『ミクロログス』『韻文規則』『アンティフォナリウム序文』『未知の聖歌に関するミカエルへの書簡』) と、「ミクロログス」目次の概観
3. ガイドの言う「音」とは? (ノタ nota、トヌス tonus、ヴォクス vox の微妙な使い分け)
4. 「音の並び方」から「旋法」へ (音と音の親近関係、フィナリスとモドゥスの関係、旋法の誕生へ)
5. ガイドの作曲法 (言葉と音の関係、オルガヌムの作曲法)
6. 有線記譜法の提唱 (線を引く、線を増やす、色を付ける、音部記号として使う etc.)
7. ソルミゼーション (「聖ヨハネの賛歌」を用いた「ドレミ」の始まり、ガイドの理論の伝承)
8. ガイドの手 (さまざまな「ガイドの手」、なぜ「手」が使われたのか?)

ガイドが聖歌の口伝や丸暗記に頼らない独自の歌唱法を教えた少年たちのうち、ある者は「3 日もたたぬうちに」知らない聖歌を初見で歌えるようにな

ったとか。その教育効果を周囲に妬まれて追放されたという彼自身の記述からは、当時それだけ修道院における良い歌唱指導者の需要が高まっていたこと、そのような教師が実は少なかったことが窺えるというお話は印象深く、「ミクロログス」が教養のためではなく、実践第一の理論書だったことの背景が垣間見えて来ました（合理的で論理的、大胆な「割り切りの良さ」も持ったガイドに受験指導をさせたら絶対上手いに違いない、との先生の言には一同大笑い!）。

また、先生が研究された膨大な資料から、有線記譜法で書かれたさまざまな写本や、十人十色の「ガイドの手」を見せて頂き、想像以上に試行錯誤を重ねられた過程を視覚的にも実感することが出来たの

も新鮮でした。

質疑応答では鍵盤楽器、ヴィオラ・ダ・ガンバ、声楽など参加者それぞれの専門的な視点から質問や意見が飛び交い、最後まで熱気も刺激も溢れる会となりました。参加させていただき、有難うございました。（レポート執筆：早川幸子）



第37回例会（2018年度第5回定例会）

【みんなで作るフリーコンサート in 松本記念音楽迎賓館】

2019. 2. 3. 松本記念音楽迎賓館（東京）

講師：崎川 晶子

立春を翌日に控えた穏やかな陽気の中、松本記念音楽迎賓館にてフリーコンサートが開催されました。7名の参加者のうち3名が小・中学生という驚くべき事実は、時代の流れを感じました。それぞれが思い思いの演奏を繰り広げ、お互いの演奏に喝采を交わし、とても温かい雰囲気になりました。

全員の演奏の後、講師の崎川晶子先生による全体講評がありました。印象に残っている言葉は、「演奏して楽しかった!」と思えること、人前で弾く機会を大事に、そして明日からまた新しい自分となり頑張りたいということ。その後、参加者一人一人に個別に講評を頂き、和やかなムードの中、お開きとなりました。

演奏曲目は次の通りです。（敬称略）

・萩野晋帆

G.Ph.テレマン：ポーランド風組曲 二短調 TWV32:2（忠実な音楽の師）より
序曲、ラルゴ、メヌエット

F.クーブラン：クラヴサン曲集 第4巻 第20 オルドルより《王妃マリー》

G.Ph.テレマン：クラヴサンのための幻想曲 TWV33:34 より ドルチェ、アレグロ

・佐藤恵美

F.クーブラン：クラヴサン曲集 第4巻 第20 オルドルより

《ケルビムまたは愛想のよいラズユール》《クルイまたはクープリネット》《タンブーラン》

G.Ph.テレマン：パルティータ ト長調 TWV32:1（忠実な音楽の師）より
プレリュード、アリア、メヌエット、ジグ・アングレーズ

G.Ph.テレマン：クラヴサンのための幻想曲 TWV33:34 より アレグロ

・宮原温子

J.S.バッハ：パルティータ 第6番 BWV830 より サラバンド、ガヴォット

・大藤莞爾

J.J.フローベルガー：組曲 第15番 イ短調 アルマンド、ジグ、クーラント、サラバンド

・古家岳

J.S.バッハ：パルティータ 第6番 BWV830 より トッカータ、テンポ・ディ・ガヴォット、ジグ

・小林美紀

L.クーブラン：プレリュード 第7番 イ短調、プレリュード 第8番 イ長調

F.クーブラン：第1巻 第5 オルドルより《天使のような女》《ぶどう摘みの女たち》《楽しみ》《波》

・古澤晶子

J.S.バッハ：フランス組曲 第5番

アルマンド、クーラント、サラバンド、ガヴォット、ブーレ、ルール、ジーク

— 参加者の感想 —

●今回のフリーコンサートで特筆すべき点はなんといっても、出演者の年齢層が広がったことです。今回の出演者には小中学生が、僕を含めて8人中3人もいました。F.クーブラン、J.S.バッハやテレマンなどの多彩な曲が演奏され、僕にとっては初めてフローベルガーの組曲に取りくむ機会となりました。また終演後に崎川晶子先生からとても丁寧な講評をいただいたことも、大変嬉しかったです。出演者一人一人の全く違う演奏を聴くことができ、とても楽しい機会になりました。(大藤莞爾)

●今年もバッハの難曲に挑戦しました。緊張して思った通りに弾けなかった悔しさはありますが、フリーコンサートという一つの作品作りに自分が参加できた嬉しさの方が、印象に残っています。弾きたい曲には必ず難しい箇所があると思いますが、そこを乗り越えて最後まで弾き、その勢いを次の演奏者に繋げていくことによって一つの作品になるところに、

フリーコンサートの一歩の魅力があると感じています。(古家岳)

●第8回に引き続き、今回が2回目の参加になりました。チャペルのような可愛いホールで素晴らしいチェンバロを弾く事ができ、とても嬉しく思っています。また、皆様の演奏も楽しませて頂き、楽しい1日を過ごすことができました。素敵な時間をありがとうございました。(古澤晶子)

(レポート執筆:古澤晶子)



🍁 2019年度第1回例会のお知らせ

例会係 cembalo_events@yahoo.co.jp

第39回例会(今年度第1回例会)「イギリスヴァージナル音楽装飾法の新解釈」

【講師】平林朝子 【日時】6月9日(日) 14:00-16:00 【会場】桐朋学園調布キャンパス 222 教室

詳細は近日公開、ホームページやメールマガジンをご覧ください!

協会ホームページ <https://japanharpsichordsociety.jimdo.com>

* 例会の企画案を随時募集中!

協会ホームページの「お問い合わせ」から、「例会について ご予約・お問い合わせ」をご参照ください。

🍁 『年報 第3号』発行のお知らせ

とうとう第3号の発行も目前となりました。今年は微力ながら年報委員長を仰せつかり、目下校正原稿とにらめっこの日々ですが、既に手元に2冊の素晴らしいお手本があるので心強い限りです。それでも修正点は後からあとから、きりがなく出てくるものです。委員一同総力を挙げて良い物を世の中に送り出そうと尽力しております。既に来号の記事も視野に入れて活動しておりますので、皆様のアイデア、投稿、ご感想など以下のメールに頂ければ幸いです。ご忌憚のないご意見をお待ちしております。

◆ 年報委員会メール: cembalonenpou@gmail.com 栗形亜樹子(年報委員長、副会長)

さて、第3号の内容を少し覗いてみましょう!

- ・特集 : 「フランソワ・クーブラン その時代と音楽(仮題)」
- ・研究レポート、論文: 前号のミルヒマイア一訳の後半ほか、2本の大変興味深い論文です。
- ・第1号からの連載 : アトリ工探訪、楽譜・楽書紹介など。2018年度は本当に多くの貴重な訳本が刊行され、来年度に先送りされたものが既に2冊もあるほどです。
- ・会員録音物コーナー、博物館レポートも引き続き充実しています。
- ・海外レポート : アメリカ、ドイツ、フランスで、今までになかった活動をなさっている会員の興味深いご報告です。

年報第3号 アルテスパブリッシング刊 定価税込 3,000円
会員：無料配布 サポーター・法人会員・団体会員：有料購読

5月の「チェンバロの日！2019」に発刊予定、当日ご参加の方には先行配布、販売を行います。
(年報委員会)

会計より

< 更新手続き / 諸変更について >

- * お申し出がない限り毎年自動継続となり、更新手続き（会費納入）をお願いしています。
- * お振込みの確認後、新しい会員証を送付いたします。
- * 前年度分も未納の方は、あわせてお振込みください。年会費のお支払い状況に関しては事務局までお問い合わせください。
- * 例会やイベント会場でも更新手続きを受け付けております。どうぞご利用ください。
- * 協会ホームページ内「会員専用ページ」を閲覧するために必要なパスワードは毎年更新しており、その年度の年会費をお振込みくださった方に個別にお知らせしております。

【年会費】 会員：6,000円（学生：3,000円） サポーター：3,000円 法人・団体会員：10,000円

< 賛助金の募集 >

- * より良い協会活動の実現のため、随時、賛助金を受け付けております。
- * 下記口座へお振込みされる際は、その旨事務局までお知らせくださるようお願いいたします。

【賛助金】 会員・学生会員・サポーター：一口3,000円～ 法人・団体会員：一口10,000円～

< 年会費・賛助金お振込み先 >

ゆうちょ銀行

名義：日本チェンバロ協会
記号：10090 番号：07246611

※ ゆうちょ銀行以外の金融機関からお振込みの場合

店名：〇〇八（ゼロゼロ八チ） 店番：008
預金種目：普通預金 口座番号：0724661

* 振込用紙の送付は行っておりません。 * 手数料はご負担願います。

事務局より

事務局：japan.harpsichord.society.jp@gmail.com

- ・メールアドレスや住所、会員区分の変更、退会のご連絡、年会費のお支払い状況に関するお問い合わせは、事務局までお願いいたします。
- ・最新のメールマガジン（第91号）を受信できていらっしゃらない方は、ご連絡ください。
- ・後援申請の手続きにつきましては、ホームページをご参照ください。←「日本チェンバロ協会 後援申請」を検索。
- ・協会の運営に携わってくださる方を募集しております！詳細は、事務局へお気軽にお問い合わせください。



日本チェンバロ協会
Japan Harpsichord Society

会報第12号 2019年4月1日発行 発行人：久保田慶一
編集：石川陽子、流尾真衣、山本庸子

日本チェンバロ協会事務局
住所：〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1丁目44-4 1階
電話：080-9661-8196（火曜日10～17時に対応）
メール：japan.harpsichord.society.jp@gmail.com
ホームページ：https://japanharpsichordsociety.jimdo.com

